

The Ministry of Fear について

— 不安と恐怖を生む要因 —

植木 利彦

倉敷芸術科学大学教養学部

(1996年9月30日 受理)

I

1943年に出版された*The Ministry of Fear*¹⁾の主人公アーサー・ロウは、不治の病に冒され、苦悶する妻を見るに忍びなく、憐憫 (pity) の情から彼女を殺害した。その結果として、彼の幼年時代の無垢と冒険に満ちあふれた理想の世界と、妻殺しに端を発する暗く、惨めで殺伐とした現実の世界との落差の大きさに戸惑うばかりである。事件後、裁判では彼の殺人が妻にたいするmercy-killingと判断された結果、無罪放免となり、爆撃に荒廃したロンドンの片隅で隠れるように生活している。その後、彼の妻殺しの動機が、“it was he who had not been able to bear his wife's pain - and not she. . . it was her endurance and her patience which he had found most unbearable.” (p.98) という事実でロウは苛まれ続けている。それでも幼年時代の夢の世界を捨て切れぬ主人公が、ふとした偶然から幼年時代を思い起こさせてくれる慈善市を訪れ、そこでナチのスパイたちが英国海軍の軍事機密を隠したケーキを手に入れたために命を狙われる。彼らの仕掛けた爆弾の衝撃が原因で過去20年間の記憶を喪失し、覚えているのは青春時代までという無垢の時代にさかのぼった主人公が、無垢の時代にふさわしい理想的で快適なサナトリウムで治療を受ける。ところがサナトリウムの責任者であるフォレスター博士というのは英国人でありながらナチの手先となって働いている人物である。ロウのいる病棟と凶暴な患者が収容される特別病棟というのは、実はロウの妻殺しを境とする理想の世界と現実の世界のように‘the green baize door’を挟んで極端に違う世界なのである。サナトリウムそのものが理想の世界（虚構の世界）と現実の世界を表現しているミニ世界であり、特別病棟に監禁されているストーンを救い出す努力をする過程でロウがその違いを認識し、虚構の美しい世界から現実の醜い世界に順応しつつ、かつての記憶を取り戻し、記憶の面でも人間的な面でも一個の完結した人間に戻る話である。

従って、筋は二重構造になっていて、そこに憐憫の情が絡んで話は難しくなる。‘The main theme of this book is the isolating and destrutive force of pity.’²⁾であるが、この小論では小説に醸し出されている不安感と恐怖が個人的な憐憫の情と組織的な犯罪に基づくものであることを分析して明らかにしてみたい。

II

ロウの持って生まれた資質の一つである憐憫の情というものは、あらゆる場合に彼が非常に強く感じ、憐憫の情を覚えた対象のためにはどんなことでもしかねない感情であることは、彼の亡妻、アリスの件を待つまでもなく、ストーンが拘束衣を着せられていることを知った場合にも見られたことである。唯、憐憫と共感 (compassion) とは本質的に異なるものである。compassionとはpityよりも意味が強く、相手と同じ立場に立ち、相手の気持ちを理解し、共に苦しみ、積極的に相手を助けてやろうとする感情であり、創造的であると同時に忍耐を必要とするものであるが、pityとは自分より弱いものにたいする哀れみの感情である、と定義できるであろう。グリーンはこの憐憫というものは破壊的な要因を秘めた危険なものと考えている節がある。その点について先ず、幾つかの例を挙げて考察してみたい。

ジョンズ (Johns) のフォレスター博士殺害の動機は次の通りである。

... love of one's fellow-man, a love which had astonishingly flamed into action in the heart of respectable, hero-worshipping Johns. The doctor had been too sure of Johns: he had not realised that respect is really less reliable than fear: a man may be more ready to kill one he respects than to betray him to the police. . . , he was not ruining the man he respected - he was saving him from the interminable proceedings of the law courts, from the crudities of judge, and the indignity of depending on the shallow opinion of twelve men picked at random. (pp.211-12)

ジョンズの憐憫が博士の命を絶つという破壊的な行為に彼を駆り立てたのであるが、彼の行為はただそれだけで終わるのではなくて、ジョンズはスパイ組織の全貌を解明できる最大の手掛かりとなる博士を殺害したのである。その結果、その組織の解明に全力を傾注しているブレンティス氏を初めとする警察の努力は水泡に帰し、また多くの英国人がこのスパイ組織に脅迫され、協力させられたりすることになる。そして多くの不幸な結果が英国社会にもたらされるのである。ジョンズの個人的な憐憫感情から出た行為は国家、社会にどれだけの被害をもたらすか計り知れないものである。

パディントン駅のトイレの中で、自分以外の人間にはあれほど冷酷であったが、逃走の手段を完全に絶たれ、英国の警察の手に落ち、拷問にかけられることには耐えられないナチのスパイ組織の首領、ウィリーは自殺をするために一発だけ弾丸が装填されている拳銃をロウにせがむ。ロウは拷問に苦しむウィリーを想像し、憐憫の情から彼にピストルを手渡したのだろうか？ どうもそうではないらしい。アンナの兄、ウィリーが所持しているマイクロ・フィルムをロウが取り返し、尚、兄が生存しているということは、ロウとウィリーの二人が話し合ったことであり、既に兄がロウに過去の妻殺しの事実を教えたかもしれないし、或いは、将来、教えるかもしれないという不安にアンナが苛まれ続けることに繋がるのである。ロウはアンナへの憐憫からそうした彼女の不安を取り除いてやりたいために拳銃を手渡したと考えるのが妥当で

あろう。しかしそれはアンナとロウの私的な関係だけを考慮した行為であって、その結果は、ジョন্ズの行為と同じく、国家、社会にどれだけの損失をもたらすか知れたものではなく、ロウの行為は軽率の誹りを免れない。

洋服屋の従業員フォードもまたしかり。彼の自殺行為もウィリーと同じく、自らが苦しめられる拷問を回避する自己憐憫から出た手段であろうが、その背後には、役に立たなくなった者は生存する権利はないとするあの独善的で冷酷なナチの論理が存在していると考えられる。これはまさに生命の軽視であり、憐憫の情のあるところ常に死がつきまとう。

既述したような出来事があつて、最終的にロウはアンナと生活をする事になったが、彼の過去の出来事を彼が知ったことを彼女には知られないように努力して、彼女を幸せにしようとする彼の気持ちは、彼女が知っている彼の過去の妻殺しの事実を彼には絶対に知らさずにおこうとする彼女の気持ちと同質のものであり、その感情はpityではなく、compassionである。アンナにたいする愛の中で共に苦しむことが亡妻アリスに対するロウの償いとなるのであるが、お互いに彼の過去については真実を知られないように敵でも見張るように、グリーンのいう恐怖省の一員となって、これからの人生を過ごしていくことになるのである。

しかしこの小説の結末が我々に明るい未来を予測させず、暗雲の垂れ込める嵐の来そうな未来を予測させるのは、むしろそうした秘密が宿されていることよりも、ロウの性格そのものにあるように思えるのである。何故なら、ロウの過去のことについていえば、彼が知っているか否かを彼女に伝える決定権は彼の側にあるからロウの決意次第で何とか上手くいきそうであるが、これから先、ロウが憐憫の情を抱かざるを得ないような状況をアンナが具現する場合、例えば、アンナがアリスと同じような病状に陥った場合を想定すれば、一体誰にロウの心の底からあの憐憫の情がわき上がってきて、亡妻に対するのと同じような行為に走らないと保証できるであろうか？

ロウの場合、妻の殺害は彼女の苦痛を取り除いてやるためのやむをえぬ行為であったとする判決が裁判で下されているが、彼が7才の時の出来事、そしてストーンが拘束衣を着せられ、苦しみ、もがきながら殺害された事実を知ったときの彼の気持（“He said slowly, ‘I’d like. . . how I’d like. . . and felt cruelly waking beside pity, its old and tried companion” (p.210)）を考えれば、苦痛に耐えられなかったのは彼自身であったことが明らかである。従って彼の憐憫の情から出る行為は自己愛の行為、いうならば、エゴイスティックな破壊的行為の変形に過ぎない。何故なら、憐憫の対象が無くなれば、そのために自分自身が苦しまなくても済むのである。つまり、対象にたいする自分の責任が無くなることであり、自己責任の回避のためにその対象を犠牲にしたのである。“Pity is cruel. Pity destroys. Love isn’t safe when pity’s prowling round.” (p.255)

憐憫の情というもの運命によって虐げられている不幸な人々を哀れみ嘆きながら、破壊していく者に涙をそそいでやり、そうすることによって、永遠に自分たちを煩わせる良心の呵責をなだめ鎮めるものなのである。そこには相手を自分より劣った者であるとする感情が介在していることは否定できない。唯、ロウの場合、妻に憐憫を感じるだけではなく、自分の苦悩か

ら逃れるために妻を犠牲にした自分のエゴイズムを意識するだけの知性を持っていたことが、良心の呵責を生み “. . . he has, through the mercy killing of his wife, destroyed his possibilities for peace for ever, just as Macbeth, through his crime, murders sleep.”³⁾

こう考えてみると、人間の性格そのものの中に憐憫と共感を覚える二つの感情があるが、憐憫とは人が苦境に陥っている場合、その人の感情、理性、人格などを無視して、一方的に解決策がないと判断し、一見慈悲深く見える人道的な理由を見出し、手を下す人間を本人の心的苦悩から解放するという利己的な手段、即ち、対象の抹殺を計る絶望から生じた手段といえる。

III

ウィリーは、古いヨーロッパ社会の秩序を破壊して、新しい秩序と経済理念を生み出そうとするナチの理想主義に傾倒しているようであるが、それは表面的な理論武装、或いは、行動のための動機付けであって、本質的には破壊そのものを象徴するニヒリストに過ぎない。何故なら、A.A. DeVitesがいうように、ウィリーやフォレスター博士の主義主張には *The Power and the Groly* の lieutenant、— 彼は強い政府が国民に食料と教育をもたらし、ひいては国民の幸福に繋がると信じて行動している — のような信念はどこにも見受けられない。⁴⁾ フォレスター博士はトルストイの著作に傍線を施した箇所について言及されているだけで、ウィリーは一度として彼の意見を述べることはない。彼が述べたことといえば、現代的な殺人行為についてだけである。彼の美貌はまさにナチが唱える美しい空虚な理想論を表徴しているが、彼は妹であれ、目的のためには容赦なく殺害に及ぶ人間であり、そこには人間的な暖かさも個人的な魅力も理念も持たない単なる殺人鬼である。

Watching the sleeping man he could realize a little of the force and the grace and the attraction of nihilism - of not caring for anything, of having no rules and feeling no love. Life became simple. . . (p.237)

即ち、ウィリーは破壊的なナチの荒廃を象徴しているだけである。

そしてもう一人の仲間、プール (“He was dark and dwarfish and twisted in his enormous shoulders with infantile paralysis.” (p.17)) は、一流の写真技師で蜂の生態研究者でもあるが、ケーキの中に隠されたマイクロ・フィルムを取り返しに来たとき、ロウの部屋で次のようにいう。

‘I was thinking,’ he said, ‘while you were out of the room that it’s intellectuals like ourselves who are the only free men. Not bound by conventions, patriotic emotions, sentimentality. . . we haven’t what they call a stake in the country. . . .’ (p.24)

自分が知識人であることを鼻にかけているところ、進歩的な考え方をしていると自惚れているところは他のナチの連中と変わるところはない。彼はロウの毒殺、ストーンの殺害、そして多分私立探偵ジョーンズ (Jones) の殺害にも手を貸した冷酷無慈悲な男である。

Pool is shown no mercy. He combs his scruffy scalp with his fingers, he moves "like something on wheels," and he bears, "steadily down on Rowe like something mechanized." It is as if his polio expresses an inner depravity.⁵⁾

プールの異常性もこれまたナチの異常性を具体的に表したものと考えられる。

また、フォレスター博士には医者としての知識はあっても、患者の人間性を認めない自惚れや、生意気な患者 (コンウエイ) を癩癪から死に追いやったように、患者の身になって治療する配慮に欠けるところがある。彼らに共通していることは、他人に苦痛を与えることに対しては非常に冷酷であることである。

このような精神的に不具な人間が不完全なナチの理論に心酔したり、何らかの過去の弱みにつけ込まれてナチの餌食となって、ナチに協力しているのであるが、その結果が一般人をも巻き込む組織犯罪の恐怖を強めているのである。こうした歪んだナチの考え方は、やはりあの療養所の組織と人々によって象徴されている。ディグビー (ロウの記憶喪失後療養所で付けられた名前) のいる人工的な平和な病室と特別病棟とを隔てているあの 'the green baize door' を挟んで展開されている二つの世界である。表面上は穏やかで設備のいき届いた理想的に見える療養所であるが、'the green baize door' の向こう側では、ナチの協力者たちが蠢いている。そこでは、フォレスター博士の秘密を探り出したストーンを麻酔剤で窒息死に至らしめる残虐非道な世界が展開されるのである。同胞を裏切った博士の個人的な背信行為を隠すためには他人に苦痛を与えることなど全く気にしていない狂った理想主義者の姿を我々はそこに見る。"Dr. Forrester's sanatorium is the micro-cosm of the world "they' have created."⁶⁾

精神的な病を治療する療養所とは本来如何なるものであるか？そこは単なる医療機関ではなく、治療する者とされる者とが信頼と愛情によって固く結ばれていることが基本的な条件である。しかもそうした社会のミニチュア版ともいえる療養所は老若男女、世話をする者とされる者、諸々の人々から成立しているのが常識である。患者の一人一人がそれぞれの人生を生きているのであって、本人の生命は、高齢であっても、社会の被扶養者であっても、精神異常者であっても、他者には理解のできない独自の価値を持った生命なのである。従って、たとえ博士がその組織の責任者であっても、患者の人生の価値と生死を軽々に決定できるものではない。このことは上は国家の指導者から下は社会の最小形成集団である家庭に至るまで然りである。

フォレスター博士の療養所がそうした条件を欠いていることは、理想的に見える療養所組織そのものが不完全なもの、不健全なものであること、ひいては博士が協力しているナチそのものとナチの理論の不完全さ、不健全さを示すものである。

The doctor had once said, 'It's what any State medical service has sooner or later got to face. If you are going to be kept alive in institutions run by and paid for by the State, you must accept the State's right to economise when necessary. . . .' (p.212)

老人や不治の病人を処するナチのやり方を聞いても全く動揺しないフォレスター博士の最大の弱点は、観念的な理論の根底に血の通った人間性が存在しないことである。従って博士は理論を愛しているのであって生身の人間を愛しているのではないということになる。それが博士がトルストイの主張に傾倒している最大の原因である。トルストイは次のようにいう。

'Remembering all the evil I have done, suffered and seen, resulting from the enmity of nations, it is clear to me that the cause of it all lay in the gross fraud called patriotism and love of one's country. . . .' (p.149)

そして次のようにもいう。

'What seemed to me good and lofty - love of fatherland, of one's own people - became to me repulsive and pitiable. What seemed to me bad and shameful - rejection of fatherland and cosmopolitanism - now appeared to me on the contrary good and noble.' (p.214)

その結果、Peter Wolfe がいうように “Slavery to an ideal, even humanity, inhibits life. Dr. Forrester, who thinks of people as specimens under his microscope, is properly called “a victim.””⁷⁾

しかし、我々人間は抽象的な観念だけで生きているのではない。先ず、生まれた国、育った土地を愛し、自分の身近にいる人々を愛し、身近にいる人々に愛されて生きていくのである。具体的な愛し愛される対象があって後、初めて、より抽象的、観念的な対象に我々の意識、感情が向かうのであって、そうした基盤を持たずにより大きな対象に意識や感情を向けることは不合理といわざるを得ない。個人的な偏愛が普遍的な愛に発展するのであり、地域的な理解が世界的な理解に繋がるのである。個人的な極小の愛や理解と、人類愛や世界的理解とは常に表裏一体をなすものであって、どちらか一方では不完全ということになる。知識人は、往々にして、観念論にとらわれ、現実を見失いがちであるが、この不安な世界にあっては、自分の家庭、属する基本的な共同体、国家という生活の基盤となる具体的組織を構成している人々を愛し、人々と協力し、その安全を図ることが、ひいてはより大きな社会の安定に繋がることを忘れてはならない。“One can't love humanity. One can only love people.” (p.214)

ナチの主張する古い世界の国境の廃棄、新しい経済理念は、確かに古い社会では受け入れられなかったり、虐げられたり、或いは認められなかったプールやフォレスター博士そしてフォードといった人々には新鮮で、魅力的なものであったであろう。“The danger is that twisted

reasoning will impress some people just because they cannot understand it and therefore think it immensely clever.”⁸⁾ その結果、特殊な組織の特殊な理論を普遍的で理想のものと短絡して、その純粋さを求めるあまり、組織の理論を実行に移すためには全てが正当化されるという大きな誤りを犯すことになる。そしてその真理の普遍性の実現にとって不必要と認められる者にたいし国家的なテロ行為を是認することに繋がる。つまり、狂った理想主義者は目的のために手段を選ばなくなるのである。

実際、表面的には新しい秩序、価値観の確立をうたいあげながら、他方、目に見えないところでナチは、国家機関を利用して個人のプライバシーを侵害し、組織の目的のために人の弱みにつけ込んで、個人を脅迫しているのである。

‘The Germans are wonderfully thorough,’ Johns said. ‘They did that in their own country. Card-indexed all the so-called leaders, Socialites, diplomats, politicians, labour leaders, priests - and then presented the ultimatum. Everything forgiven and forgotten, or the Public Prosecutor. It wouldn't surprise me if they'd done the same thing over here. They formed, you know, a kind of Ministry of Fear - with the most efficient under-secretaries. It isn't only that they get a hold on certain people. It's the general atmosphere they spread, so that you can't depend on a soul.’
(p.136)

この不信感こそ人間の信頼関係を崩す元凶であるにもかかわらず、それが国家的な機関によって自国はもとより他国においても組織的に行われていることが、誰でもその犠牲になりかねない恐怖感を我々の間に生み出し、お互いが疑心暗鬼になる最悪の状態に陥れているのである。

IV

我々個人や我々の属する共同体を不幸な結果に陥れる要因が、我々個人や共同体の外にあるのではなく、内からそのものを崩壊させていく内在的な要因であるところに *The Ministry of Fear* の恐ろしさがある。

ここでいう恐怖、或いは不安とは、単なる怪奇な出来事や劣情から生じる殺生を意味するのではない。我々が他者に対して抱く感情の中には、他者の苦しみを理解し共に解決の糸口を見いだすための努力をすることを放棄し、逆に、表面上は他者の苦しみを取り除くという口実で、実際は他者の苦しむ姿を見たくない自我を満足させるための利己的な行為に走らせる憐憫、或いは奢りが存在する。即ち、もうこれ以上自分は何の助け船も出せないことを自ら承認する感情であり、しかもその責任を全て自分で背負い込む傲慢さともいえる。この感情は、既に見てきたように、その感情を抱く本人を精神的にぎりぎりの状態まで追い込み、毒していくので、その状態から自分自身が逃れる方法として、その感情を引き起こす原因となった対象を破壊する行動に出ることが決して珍しいことではないことを思い返してみると、プレントイス氏の

言葉は我々の胸に限りない不安を引き起こすのである。

‘Pity is a terrible thing. People talk about the passion of love. Pity is the worst passion of all: we don't outlive it like sex.’ (p.200)

この事実は、程度の差こそあれ、我々全てのものが、深く愛するものを救うてだてを無くし、且つ、愛するものの苦しむ姿を見続けるときに、我々が憐憫に囚われるのであれば、誰もがロウと同じ不幸に陥らないとも限らない不安を感じさせるのである。

我々は、個人の生活においても、既に見てきたように個人の性格的弱点によって、悲劇を引き起こす可能性がある。更に国家や社会の組織までもがこうした悲劇を引き起こす要因になりうるのである。過去においては戦争とは、国家間であれ、部族間であれ、物理的な力と力の争いであったものが、現在では、単なる物理的な力の衝突で雌雄を決するのではなく、敵対する国民の中の異端分子、或いは弱みを持っている者に付け込んだり、脅すことによって、背信行為を引き起こさせるのである。ごく普通の洋服屋や牧師、写真技師や医師が恐ろしい組織犯罪の一員であることは、如何に現代社会が、犯罪者社会と一般人の社会とが全く関係のなかった昔とは違って、犯罪者社会と一般人の社会との区別のつけにくい社会であることを示すものである。“There's no longer a thing called a criminal class.” (p.46) そしてスパイの活躍する世界は小説の中ではなく、現実の社会で、しかも、市井の人間がその世界にあらゆるところで、いつ何時でも関係させられる不安と恐怖が付まとうのである。蟻の穴から堤防が決壊するように、或いは食物が腐敗菌によって次第に侵されていくように、内部崩壊を引き起こす要因を社会の内部そのものに生み出す組織的犯罪が次第にその勢力を強めている。すなわち、社会の構成員たる平凡な人間もそうした背信行為を引き起こす危険性に晒されていることが不安であり、恐怖といえる。

Notes

- 1) Graham Greene, *The Ministry of Fear* (London: William Heineman & The Bodley Head, 1986), 以後、同書からの引用は頁数のみを本文中に記す。
- 2) Richard Kelly, *Graham Greene* (New York: Frederick Ungar Publishing Co., 1984), p.127
- 3) Grahme Smith, *The Achievement of Graham Greene* (Sussex: The Harvester Press, 1986), p.44
- 4) A.A. DeVitis, *Graham Greene* (Boston, Massachusetts: Twayne Publishers, 1986), pp.39-40
- 5) Peter Wolfe, *Graham Greene the Entertainer* (Carbondale and Edwardsville, Southern Illinois University Press, 1972), pp.110-111
- 6) J.p. Kulshrestha, *Graham Greene: The Novelist* (New Delhi: Macmillan India Limited, 1977), p.203
- 7) Peter Wolfe, p.112
- 8) John Atkins, *Graham Greene* (London: Calder and Boyars, 1966), p.130

On *The Ministry of Fear*
— Factors of Uneasiness and Fear —

Toshihiko UEKI

Faculty of Liberal Arts and Science,

Kurashiki University of Science and the Arts,

2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712, Japan

(Received September 30, 1996)

There are two kinds of uneasiness and fear *The Ministry of Fear* leaves us after having read.

The one is caused not by violent murders and the devastating blitzes on London in the novel, but by the dim possibility existing in us who may do the same disgusting and humiliating acts that the characters in the novel have done through pity to the other persons in order to escape from keeping an eye on them who is driven into a corner and struggles with no hope to live.

The other is caused by the status quo of our society in which treacherous spy groups plot a plan to throw our society into confusion and set a trap in which an ordinary person may be caught to cooperate for their purpose.

In this paper we want to analyse the characteristics of the uneasiness and fear caused by the novel.